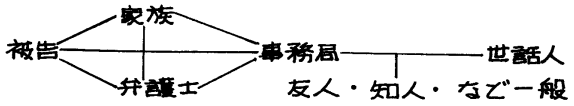

C. 行動方針（要旨）

(1) 弁護士，被告家族の立場を尊重し，両者の諸活動，両者間のコミュニケートなどを援助する。

(2) 事実関係（真相）を，調査・集約し，被告自身の政治的見解の表明を保障し，それらを通して，全人民への報告書を作成し，提出する。又，それ媒介におこる全人民的規模での一大論争を，保障し集約する。

(3) 本公判を契機に，強化・拡大される死刑・保安処分・世論操作などの，権力・マスコミの総■攻撃に対し，ありとあらゆる方法で抗する。

☆. 故，連合赤軍兵士，追悼の意をもっての，「共同墓碑」に■設立に関しては，別紙を参照されたし。

1972・3・31
日本赤色救援会

共同墓碑設立への呼びかけ

あらゆる場で，様々なかかわりかたで，幾多の矛盾を止揚すべく，人間性の回復を克ち取るために，真の解放を目指して斗い続けている全ての同志・兄弟たち！

今回の「事件」のショックは言語を絶する程の重さで我々にのしかかり，胸の空洞を吹きぬける一陣の風すら我々は防ぐ術を知らない。しかし，この深刻な問題を正面から受けとめ，いささかも曖昧にすることなく敵権力のあらゆる攻撃に抗しつつ，自己の思想性をかけて事実の究明を行い，根底的な総括をすると共に，これを歴史的な反面教訓としてゆきたい。又，そうすることが■14名の故同志たちを心から悼むこととなり，革命運動総体の前進にもつながることになるでありましょう。

又，人民内部の矛盾として階級斗争の犠牲者となった彼らは，最後まで，我々と同様のまっかなプロレタリア精神を志向していたことを信じて疑いません。我々は彼らの遺志をひきつぎ，かならずや革命戦争を勝利にみちびくためのいかなる努力をも辞さないでありましょう。そうであるが故

に，御家族・友人でのみ，個別に墓を築くだけでなく，共通の意志として墓碑をたてることを自己目的化することなく，我々の胸に彼らの怨哀を刻印として秘めるのみに終らず，我々の胸のうちを共同墓碑として具体化したいと考えます。

この提案に賛同して，適切な土地を提供して下さる方，あるいは御紹介下さる方，又は基金のカンパをして下さる方，等々の積極的な御協力を心から酔えたいと思います。

もっぷる社発行出版物

★去っぷる NO.0 一〇〇円
★去っぷる NO.1 二五〇円
★12・18 二〇〇円
★月03 三〇〇円
★「去っぷる通信」
半年 八〇〇円
一年 五〇〇円

★取扱書店
（東京）
・模索舎・吉祥寺ワニタ
・内山書店・コマバ書店
・アジアン書房・
★各書店か去っぷる社へ現金書留で。

★ H.J支援委編・発行「不死鳥作戦」No.2.3.4
各50～100円

特別アピール1.
「共産主義者同盟赤軍派」

「我々は明日のジョーである」―二年前の本日，我が赤軍派の精鋭の同志たち九名は，そう宣言し，全世界の闘う兄弟たちの下に飛躍した。我々は，多くの兄弟，友人の全てを前に，その比類なき勇気と，その限りない希望を示したこのよど号ハイジャックを「不死鳥（フェニックス）作戦」と呼び，革命戦争の赤光が不滅であることを，そして我が赤軍派の赤い血■もまた，不滅であることを誇りをもって再確認した。

そうしたよど号ハイジャックの二周年でもある本集会に際し，まずもって我々は，この不死鳥（フェニックス）精神こそ，我が赤軍派のそれであり，あの銃撃戦を闘った連合赤軍兵士のそれであり，また苛酷にも同志間の矛盾を負い倒れた故連合赤軍兵士のそれであることを，そしてかかる精神を絆にして銃撃戦を闘った連合赤軍兵士も，倒れた故連合赤軍兵士も，残った我々も，全て同志であり，兄弟であることを，今一度声を大にして宣言しよう。

故連合赤軍兵士たちよ。我々はこの宣言をもって，諸君らへの追悼の意としよう。諸君らも，我

々も、ともに栄光のプロレタリアの従であり、ともに不死鳥（フェニックス）の如く不滅である。歴史は、そして全人民は、正しく我々を審判するであろう。我々は、その日のために、確信をもって再生し、更なる闘いを展開しよう。故連合赤軍兵士に、栄光を。

連合赤軍兵士の英雄的死闘としての銃撃戦 ― そしてその敗北に並行し顕在化された苛酷なる党内国内矛盾としての、いわゆる「処刑」 ― その両者不可分なる現実は、六九年安保攻防敗北以降の日本階級闘争の直面した武装闘争のリアリティと、その冷厳たる深淵を、余りにも象徴的に体現するとともに、はがゆい程の未■熟さを引きずりつつ、その前線を荷ってきた我が赤軍派にとっても、その発足以降歩んだ栄光と悲惨の若闘の歴史を余りにも凝縮し、体現した。我々は、今こそ、多くの兄弟、友人の前に自らの姿勢を明らかにし、真摯にその批判を受けとめ、百花斉放をもってともにその教訓の血肉化作業に着手することで、正しくその再生の路を歩まなければならない。

まずその一つとして、今回のいわゆる「処刑」が、昨夏、連合赤軍誕生以降、我が赤軍派と、その最愛の盟友である日共（革命左派）の両者を中心にして進められた、より高次な団結（いわゆる「新党」結成）に向けたその党内軍内矛盾としてあったことを明らかにしなければならない。そし

てそうした党内軍内矛盾が多くの同志、兄弟、友人を含めた味方■総体内部の矛盾として、その相互関係をもつものであったにも拘らず、且つ団結あっての制裁であるにも拘らず、その矛盾に対し余りにも閉鎖的に、余りにも独断的に、余りにも早急に、その処理を計ったことを、またその結果多くの秀れた同志たちを葬り、多くの心ある兄弟、友人をして、重大なる心痛とその団結に亀裂を起し、狂喜する権力 ― マスコミの総攻撃の前にさらしめたことを、そしてそれらの重大さを■予感しつつも事前にこれを阻止するだけの指導性とその相互批判の作風を持ち得ず連合赤軍兵士をして、いわゆる「処刑」に至らしめたことを、全兄弟、全友人の前に深く自己批判しなければならない。

我が赤軍派は、かかる重大な責任に於いていわゆる「処刑」に参加した我が同盟員に対し、その真相と、全同盟員、全兄弟、全友人へのその自己批判をもって、全兄弟、全友人の前にその審判を仰ぐことを通し、いわ■ゆる「処刑」に参加した我が同盟員に対する厳格なる処分を行うものである。

今回の銃撃戦といわゆる「処刑」が、両者不可分の冷厳たる現実であること、そしてその現実が、昨夏連合赤軍誕生以降、我が赤軍派とその盟友日共（革命左派）の両者を中心にして進められたより高次な団結（いわゆる「新党」結成）に向けた

ものとしてあったことは、先にも確認したとうりである。ここに於いてまず我々はその武装し大同団結することの現下の意義とその歴史的必然性の再確認をもって、このより高次な団結に向けた意識性とその実践を高く評価するものである。今回の連合赤軍の敗北とその党内軍内矛盾が如何に苛酷であったにせよ、否、そうであるが故に、我々はその試練を通し、更なる意識性と更なる実践をもって、今回中途挫折したより高次な団結に向けた事業を、断乎として継承するであろう。

次に我々はそうしたより高次な団結に向けた事業が断乎として歴史的必然性をもった正しいものであったにも拘■らず、何故中途挫折し、何故重大な犠牲を払ったかの問題として先に述べた党内軍内矛盾の大胆な切開と、全同盟、全兄弟、全友人へのその全体化に着手しなければならない。そのことは同時に、六九年秋以降の第一期建軍運動を荷って来た我々にとって、昨秋以降の本格的武装闘争の昂揚、革命戦争勢力の拡大の新たな情勢、その高次な自然発生性に対する指導の危機の問題として、今一度如何なる党 ― 軍 ― 人民の連携（陣型）を確立するのか、そしてそれを通じ如何なる武装闘争への参加形態（連軍運動）を確立するのかの課題に応えてゆくことでもある。

一見、孤立したかの如き闘いとして出発し、展開されて来た昨今までの我々の運動は今や、その

主体的条件、即ち、六九年秋、大菩薩峠での敗北の教訓としての蜂起至上主義との訣別 ― 持久戦略としての、建党建軍遊撃戦の確定、党・軍一体化（党の軍化、軍の党化）の試行、日共（革命左派）との武装団結、等々に於いても、又、その客観的条件、即ち、無名、無数の独立戦闘団による爆弾、爆破闘争の拡大、アンチ「六一八派」としての膨大な大衆的戦争勢力の存在、武装斗争への支持・支援としての赤色救援会運動の開始、等々においても、一定の到達段階に達したにも拘らず今なお、昨今までの第一期建軍運動の惰性に拝跪しつつ、その運動、組織的飛躍を困難なものにしている。そのことは、かって六〇年代后半の戦闘的実力斗争段階における高次な自然発生性としての全共斗運動に対し、応え切れなかった我々をも含めた六一八派の指導の危機状況と、一見相似しつつ、七〇年代前半の本格的武装闘争の初期段階における高次な自然発生性（即ち、前述した客体的条件を参照）に対し、「党の軍隊（中央軍）及びその■大衆的フラクション（革命戦線）への結集」の要求としてしか応え得ない指導の危機（その偏狭さ、その手工業性）の克服として確認されねばならない。又、そうした第一期建軍運動の止揚の一環としてあった「蜂起至上主義との訣別 ― 持久戦略としての一定の到達地平を、より血肉化すべく、今や、組織戦術としても、「党の軍隊（中央

軍）至上主義との訣別」及び「党の軍隊（中央軍）への編入機能と党派宣伝機能でしかなかった革命戦線運動との訣別」などの方向においても、総点検されねばならない。

我々は、かかる課題に対し、総力をあげ、全同志、全兄弟、全友人とともに、百花斉放をもって問題を深化し、普遍化し、より高次な党 ― 軍 ― 人民の連携（陣型）として、より高次の武装斗争への参加形態として（建軍運動）その物質化を計るであろう。

最后に、人民の軍隊 ― 人民の一翼たらんとし、その発足以降、限りない創造性と献身性をもって斗って来、今日、本集会を主催するまでに、確実に成長しつつある赤色救援会の兄弟たち、そして今日まで、有形無形の支持・支援を示してくれ、今回の事態で深く心痛されている多くの心ある兄弟たち、友人たち。我々は、現下の試練を通し、そしてその教訓を血肉化し、近い将来、必ずや人民の党 ― 人民の軍隊へと再生するだろうことを約束しよう。

本集会の成功を祝して。

故、連合赤軍兵士に栄光を。

―― 1972年3月31日 ――

共産主義者同盟赤軍派・東京都委員会

同　　関西地方委員会

特別アピール2.

「日本共産党(革命左派) 神奈川県常任委員会」

米日反動派の侵略戦争を革命戦争で打ち破るために斗われている建軍武装斗争の過程において、今回、一部の革命派の同志たちによって、同志が犠牲になるという痛ましい事態が発生しました。我々は、犠牲になられた同志の皆さんに、心からの哀悼の意を表わします。そして、斗いなかばして倒れた同志の皆さんを、革命烈士として永遠にとむらうであろうことを誓います。

この問題に関して、我々の基本的見解を表明します。（我々は、獄中にあるためこれらについてほんのわずかのニュースしかわかりませんが、その範囲内でします。又、犠牲にした革命派の同志たちが、現在、過酷な取調中であることを考慮して述べます。）

我々には、一部の限られたニュースから判断すればこの問題は、人民内部の矛盾としか思われません。我々は、人民内部の矛盾をこのような形で処理することに断固反対します。敵や、敵の手先（スパイ）逃亡して確実に敵に味方を売り渡すもの、それが確固とした事実によって立証されている者に対しては、敵味方の矛盾の処理の仕方、暴力によって解決することは、全く正当であり、正

しいと考えます。しかし、これを人民内部の矛盾にあてはめることは全く誤りです。人民内部の政治、思想、作風（規律）の問題は、政治、思想の教育によって、説得によって政治的自覚を高めることによって解決すべきです。

我々は、一部の革命派同志たちが、どうしてこのような誤りを犯したのか、その根本原因をつぎのように分析しています。それは、一部革命派同志たちは建軍武装斗争を政治によって統師することをせず、政治を重視しないで推し進めてきた結果であると考えます。プロレタリア政治、反米愛国路線によって建軍武装斗争を統師しなかった結果だと思います。今回のことは、政治抜き『軍事路線』の破産を宣告したものと思います。私達獄中の同志は、七月十五日の統一赤軍結成のニュースを知った時、一部の革命派の同志たちが、政治を重視せず、反米愛国路線を放棄して、統一赤軍を結成したことに断固反対し、脱党宣言まで含めてこれに反対しました。一部の革命派の同志たちは形ハ上では、この反対意見を取り入れて、統一赤軍（中央軍と人民革命軍の事実上の合同）を連合赤軍（両者の共闘一正しい）に改めました。しかし、一部の革命派の同志たちは、依然として反米愛国路線による軍事の統師の必要を理解せず、政治『抜き』の軍事路線を推し進めたため、獄中の全ての同志がこれを断固批判し、再三、再四、

脱党宣言を含めて、七月以来、今回の事態に至るまで、この路線に警告を発してきました。

私達は、政治を抜き、反米愛国路線を放棄して軍事を進めれば、必ず失敗すると主張しつづけてきました。しかし、外の一部の革命派の同志たちは、政治を重視する問題において、この警告を無視し、獄中の批判書を握りつぶし、救対に圧力を加え獄中の批判書を全体に討論させませんでした。こうして、一部の革命派の同志たちは、新聞のニュースによると（正確かどうかはわからぬが、統一赤軍を結成したことはほぼ事実であろう。）我々の警告を無視し、もし、独断でこうしたことをすれば獄中全員脱党すると宣言していた統一赤軍＝新党なるものを結成してしまいました。そしてこれは一部の報道によると、我々と反米愛国路線、人民遊撃戦争路線、毛沢東思想を批判し、それを放棄して結成されたとも伝えられています。しかし、彼らは獄中が脱党宣言を出すのを避けるためか（それともマスコミがでたらめか）獄中の者には、合同しない、統一赤軍はつくらない、反米愛国路線は守る、人民遊撃戦争路線は守る、毛沢東思想は守ると、手紙で一月に知らせてきたので獄中一同安心していたのでした。ところがマスコミによれば、一月一日に統一赤軍＝新党を結成したそうです。反米愛国路線、人民遊撃戦争路線、毛沢東思想を放棄して。このような政治『抜き』